雨が止んだらお別れね。

eleki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨が止んだらお別れね。

【Ｎコード】

Ｎ９３９３Ｘ

【作者名】

ｅｌｅｋｉ

【あらすじ】

高校二年生の姉と、高校一年生の弟の、何となく恋愛もの。

【01】おわりの始まり、昔のこと。

ピアノの音が気持ちよかったので、冷たい木の床に耳を押しつけ、体を押しつけて、それを味わった。

高い音が素足のゆびさきひとつひとつから伝わって、耳許まで駆け上がる。

低い音は体を抱くように、辺り中からおおい被さってくる。

也美はひどく幸福だった。

音楽にはてんで疎かったので、泉が弾いている曲が何という名前なのかはわからなかった。ＣＭで何度か耳にした音楽のような気がする。

でも、そんなことを言えば「無粋だ」と泉が怒るのは目に見えていたので、言わないつもりだった。泉はひどく繊細で、也美にはわからないことで傷付いて、怒る。也美にわかるのは、泉が何を言われれば傷付くかということ。

その理由はわからない。

でも、ただ、彼が傷付くことはよくないことだと自分の中に決まりがあったので、せめて自分だけはそうならないようにしようと、それはもうずっと子供の頃から思っていた。

也美の世界は、ほんとうに泉ばかりが住んでいて、彼の色と音ばかりが蔓延している。病気のようだったし、実際「おまえは病気だ」と何人の人からも言われた。

（病気でいいわ）

呼び方なんて何でも構わないと思った。

也美は泉のことが大事だったし、大好きだったし、その気持ちが誰に何と呼ばれようと、知ったことじゃなかった。

ピアノの音が止んでしまうと、とても残念な心地になって、也美は閉じていた瞼を開くと寝返りを打った。すぐそばの、ピアノの方を見上げる。

「もうやめちゃうの？」
「雨が降ってきた」
泉は也美の問いには答えず、ひとりごとのように呟くと、椅子から立ち上がって窓辺の方へと近づいた。結露したガラスを指先で拭いて、目を凝らし、外の景色を眺める。
また背が伸びたみたい。
床の上から泉を見上げ、ぼんやりと、也美はそう思う。
細い体は相変わらずに見えるのに、いつの間にか泉は自分の背を追い越して、肩幅もずっと広くなって、少年ではなくなろうとしている。
（十六だものね）
もう高校生だ。
壁にかけられた学生服の黒が、也美の目に痛かった。
泉はまるで部屋に也美がいないかのようにふるまって、しばらく窓の外を眺めてから本棚の前に移動して、いくつか本を手に取って中身を眺め、また戻して、とやっていた。
也美は飽きもせず、そんな弟の姿を眺める。
長い指先が動くのを眺める。
ひとさし指が、本のてっぺんを引き寄せて、本棚から取り出す。ページを繰る。目が文字を追う。欠伸をする。
（なんて綺麗な子だろう）
馬鹿みたいに、也美は何度もそう思う。
泉はとても綺麗な男の子だった。たまにがさつで、いい加減なところがあるのに、どうしてか也美の中でイメージはいつも「綺麗」だ。
教室にいる、同い年の男の子たちとはまるで違う。
――梁瀬さんは、弟の方が大事なの？
不意に、誰かの言葉を思い出して、也美はまた目を閉じた。誰か――クラスメイト。男の子。最近、自分のことをじっと見る不思議な人。手紙をもらった。好きだと言われた。怖いと思った。

『泉、泉って、弟の話ばっかり』
怒られたわけじゃないのに、怒られた気分になって、也美はその時彼の前で身を竦ませた。そうすると、彼は苦笑して、困った顔になって、それから也美の方に手を伸ばした。
「……」
スン、と也美は鼻をすすり、怖かった思い出を消してしまおうとさらに強く目を閉じた。手探りで、そばにあったクッションを引き寄せ、抱き締める。
（忘れちゃえ）
言葉も、温度も、感触も。怖くて泣き出してしまった自分も。
（謝らなくちゃいけないわ）
そう浮かぶ思いも消してしまう。今だけは。この場所にいる間は。
泉がそばにいる時間だけは。
でも、忘れたいのに忘れられなくて、也美はまた鼻をすすった。油断したら涙が出てきて、閉じたまなじりから零れだし、こめかみを伝って床に落ちた。
刹那、バン、と大きな音が耳許で聞こえて、也美はびっくりして目を開けた。体がちょっと浮いてしまった気がする。
頭のすぐそばに、何冊かぶあつい本が積まれていて、そのとなりに泉が腰を下ろしていた。
ひどく不機嫌だった。
「……ごめんね」
也美はすぐに謝った。泉はもっと不機嫌な顔になった。放り出して積み上げた本から一冊を取りだし、手にとって眺め出している。
「何、泣いてるの」
理由を問いただすよりも、行動を責める語調で泉が言った。視線は本の文字を追ったまま。
「三野くんと、キスした」
泉が、冷たい目で泣いている也美のことを見下ろす。
「キスしたわ、教室で」

「それで嬉しくて、泣いてるの」
泉は意地悪だった。昔からそうだ。
「違うわ。悲しいの」
「なんで」
也美は答えず、仰向けに寝たまま、クッションで顔を覆った。
泉はそれを無視して、また本を読み始めた。
間の抜けた時計の音が響いた。
（ピアノ、弾いてくれないかしら）
思ったけれど、也美は泉にそれを頼むことはできなかった。泉のピアノは誰かが頼んで弾くものじゃない。そんなの泉のピアノじゃない。
悲しい気分にまかせてしばらく泣いて、也美はようやくひとここちつくと、クッションに大きく息を吐き出した。
その途中で、クッションが奪われた。あ、と思って見上げると、間近に泉の顔があった。
（綺麗な顔）
それを眺めきらないうちに、視界が暗くなった。唇に、おもいのほか丁寧な動きで唇が合わさってくる。
眩暈がした。
泉の唇はすぐに離れて、でもまだ間近で、也美の目を覗き込んでいる。　也美が目を閉じると、もう一度唇が触れた。
「……裏切りもの」
またすぐに離れた泉の唇が、そう呟いた。
近すぎる泉の吐息が唇を撫でて、也美は体を震わせた。悲しくて、悲しくて、涙がもっと出てきた。
泉は急に也美から興味を失くしたように、ふいと目を逸らすと起きあがり、また本のページを繰り始める。
――違うわ。
言いたいのに、声にならなかった。
泉がいちばん大好きよ。ずっとずっと昔から、最初から、泉のこ

とだけが大好きよ。
言いたいのに、声にならなかった。

後になって、思う。
この時もし泉に気持ちを伝えていたら。思っているだけではなくて、言葉にして、音にして泉に伝えていたら。
この後だって、素直に好きだと言えることができたかも知れないのに。
初めて泉とキスをしたこの時に、言えることができれば、もっとずっと違う形にできたかも知れないのに。
ずっと後になって、也美は思う。
ただその時は、悲しくて、悲しくて、声が出なかった。
誰よりも泉が好きだと言いたかったのに、言葉にならなかった。

【02】真夜中・コンビニ

玄関で物音がするので見に行ったら、泉があがりかまちのところで靴を履いていた。
「どこ行くの？」
居間から顔だけ出して訊ねると、
「コンビニ」
と短く答えが返ってくる。
「待って、あたしも行く」
言い置くと、也美は慌てて居間を出て、階段を駆け上がり自分の部屋に向かった。壁に掛かったコートを手に取り、やっぱり慌てて玄関を目指す。
玄関のドアは閉まっていて、誰の姿もなかった。
也美はコートを着込み、靴に足を入れて爪先をとんとんと地面で叩きながら、家を出た。
住宅街の真ん中にある家を出ると、左右に広くも細くもない路地が続いている。右側の方に、外灯と月明かりに照らされた細い影が見えた。也美はそれを追いかけ、隣に並ぶ。
「待っててねって、言ったのに」
言った也美の言葉は無視された。
「何買いに行くの？」
「消しゴム」
今度は答えてくれた。泉に、也美は「ああ」と頷いた。
泉はいつも、消しゴムを最後まで使わない。四隅がすべて丸くなって、擦る時紙ケースに当たるのが嫌みたいで、そうなるとまた新しい消しゴムを買いに行く。ケースを切るのも嫌だと言っていた。みすぼらしく見えて、気に入らないらしい。
じゃあ、いっそケースのところも消しゴムだといいのにね、とすごく考えてから也美が言った時、泉は少し考えた後、とても厳かで

重々しい口調と顔で、「おまえはすごく馬鹿だ」と言った。「それじゃケースの意味がない」と言われてから、也美はああそうか、と気づいた。
大して使っていないのに捨てるのは勿体ないから、也美の消しゴムはいつも泉のお下がりだった。
「また、ＭＯＮＯライト？」
「そう」
「いつもそれだね」
「一番よく消えるから」
ゆっくり歩く泉の隣で、也美もゆっくり歩く。月は中途半端な三日月型で、暗い雲に中心を消されていた。
もう日付が変わるくらいの真夜中だ。明日も学校。ふたりが通う高校は歩いてすぐの場所にあったから、始まるぎりぎりまで寝ていても大丈夫。
家から数分のコンビニに辿り着くと、泉はさっさと文房具の並ぶ棚に向かった。也美はちょっとだけ甘い物の並ぶ棚を眺めてから、雑誌コーナーに向かって、いくつかの本をぱらぱらとめくる。あまり興味の持てそうな雑誌はなかった。すぐに飲み物の棚に移る。
「水、もうない」
いつの間にか、隣に泉が来ていた。左手に消しゴムをひとつ持っている。
也美はガラス戸を開けて、中から泉の好きなミネラルウォーターのペットボトルを取り出した。泉はこれしか飲まない。
それぞれ消しゴムと、ミネラルウォーターをレジに運んで会計をすませた。
「テープでよろしいですか？」
店員に訊ねられ、泉はきっぱりと、
「嫌です」
と答えていた。
「ごめんなさい、袋、下さい」

隣で也美が店員に告げた。泉の言葉に一瞬ムッとしかけた若い男の店員は、申し訳なさそうに頼む也身を見ると、すぐに笑顔になって、小さなビニール袋に消しゴムを入れてくれた。
店を出ると、冷たい夜風がふたりの体を包んだ。泉はTシャツにジャケットを着込んだだけの薄着で、也美は風上の方に立つと、風から泉を庇うように歩き出す。
一・五リットルのペットボトルは少し重たかった。でも、ピアノを弾く大事な指を使わせる気なんてちっとも起きずに、也美はがんばってビニール袋を握る。
「コンビニだと、お水、高いね」
来た時と同じように、ゆっくりと並んで歩きながら、也美は口を開く。
「スーパーでまとめ買いすると、安いんだよ。重いから持てないけど」
「まとめ買いなんて、無駄」
寒いのか、ジャケットのポケットに両手を入れて、泉が答える。
「場所が塞がるし。必要になったら買えばいい、店なんて、すぐ近くにあるんだから」
泉はシンプルなものと、シンプルなことが好きだ。部屋が散らかっているのは我慢できないし、余計なものが置かれているのも我慢できない。
邪魔なものを捨てるのはすっきりする、と言う。油断していると、あとで切り抜いて取っておこうと思った記事のある也美の雑誌まで、ごみ箱に入れられてしまう。
消しゴムをひとつしか買わないのも、同じことだ。
「必要なものはちょっとだけでいいんだ。本当に必要なものなんて、そうたくさんはないんだから」
話す泉の声を、とてもいい気分で也美は聞いた。泉の声は冷たくて、ちょっと甘くて、聞いていると心地よい。
「じゃあね、じゃあ」

ふと思いついて、也美は隣を歩く弟を見上げた。
「たとえば、どうしても無人島に行かなくちゃいけなくなった時、ひとつしか選べないとしたら、泉が絶対に持っていく必要なものは何？」
泉はしばらく黙って、それから、
「本」
と答えた。
「ピアノじゃないの？」
ピアノほど泉の愛しているものはない。意外な答えに也美が首を傾げると、泉がまじめな顔で頷いた。
「ピアノは重いだろう。自分で『持っていく』のは非現実的だ」
でも、無人島に行かなくちゃいけないっていう質問自体が非現実的なんだから、答えだけ現実的に考えるのはちょっと変だな、と也美は思った。思ったけど口には出さなかった。
「也は？」
泉にも問われて、うーん、と也美はちょっと月を仰ぐ。
「泉、かな」
「馬鹿」
答えると、なぜか泉に怒られた。也美はちょっと不満だった。
「おまえに俺が運べるわけない。非力なくせに」
「だって、泉があたしを持っていってくれなかったら、自分で泉を運ぶしかないじゃない」
「おまえは、一緒に行くんだろ。持っていくのは、もの。そういう質問だろ」
「……」
ぎゅっと、也美は泉の腕に抱きついた。
「何だよ」
迷惑そうに言った泉の、でも顔は笑っている。
「じゃあ、ふたりで泉のピアノを運ぼうよ」
「ムーリ」

相変わらず両手をポケットに突っ込んだまま、泉はにべもなく答えた。
「今日、泉の部屋で寝てもいい？」
家の灯りが、もう間近に見えている。
「寝れば」
「明日学校に行く時、起こしてね」
「わかった。ちゃんとベッドから突き落とす」
「優しく起こしてね」
「無理」
泉が辿り着いた家の門扉に手を掛けた時、也美はそっとその腕から、絡めていた自分の腕を離した。
「で――」
玄関のドアを開けながら、泉が也美を振り返る。
「也は、何持っていくの」
一瞬、何の話かを見失ってから、也美はすぐに無人島の続きだと思い至った。
「わからない。何もなくて大丈夫かも」
「何だ。つまんない奴」
本当につまらなさそうに言って、泉はさっさと玄関で靴を脱ぎ、自分の部屋に戻ってしまった。
（だって、泉がいるから）
何となく言葉にできず、階段を登っていく泉の後ろ姿をその場で眺めながら、也美はただ思った。
一緒に行くのなら、必要なものなんて他にない。
（他にいるものなんて、ないから）
泉の部屋のドアが閉まる音を聞いてから、也美は居間に入ると、冷蔵庫にミネラルウオーターをしまい、泉の後を追ってその部屋に向かった。

【03】雨が降ってないところまで行こうよ

泉は朝から不機嫌だった。朝から雨が振っている日、それが平日なら特に、泉はいつでも不機嫌だ。

「泉、コーヒー冷めちゃうよ」

也美はごく控えめに泉へ声をかけた。泉はむっつりと黙り込んであらぬ方を見遣り、返事はない。

いつも朝からしっかり食事を取る泉なのに、こんな日は、コーヒー一杯すら飲みきらなかった。

どことなく、しょんぼりとした風情で、也美は手にした食パンをひとくち噛む。泉はコーヒーカップの中身を空にしないうち、立ち上がって、玄関に向かった。手ぶらだ。

也美は慌てて食べかけのパンをテーブルの隅に寄せ、ふたり分のコーヒーカップを流しに運び、ふたり分の学生鞄を手にすると泉の後を追った。

上がりかまちに腰を下ろした泉は、スニーカーのひもがうまく結べないようで、ますます不機嫌になっていた。

ぶかっこうな蝶々結びを作って立ち上がり、億劫そうな仕種で傘を手に取ると、泉は玄関のドアを開けた。

「泉」

待って、という間も惜しく、也美も急いでしゃがみ込み、靴を履いた。

「也美、どうしたの。うるさい」

「ごめんなさい」

慌てるあまり、玄関の置き時計を倒してしまった也美を、寝室から出てきた母親が咎めた。

也美は倒れていた時計を戻すと、外へ飛び出しかけ、すんでに自分が傘を持っていないことに思い至ってまた家の中へ戻った。

傘を握って改めて外へ出、それをさしながら道の向こうに泉の姿

を捜す。
細い雨にけぶる路地には泉の姿がなく、也美は靴の跳ね上げる泥水が制服のスカートを汚すのを気にしながら、走った。
路地を右に曲がったところに泉はいた。立ち止まり、やっぱり不機嫌そうな顔で、塀の向こうの家、庭で柴犬が雨に濡れているのを見ていた。
ひゃん、と柴犬が哀れっぽく鳴いた。也美も足を止め、泉の隣で濡れた柴犬をみつめた。
「小屋が小さすぎるんだ。それに、雨をしのぐ木だってない」
ぽつりと泉が呟いた。
その家の庭は、猫の額というのにも狭くて、小さくて粗末な犬小屋がひとつ置かれているほかは、さびた物置と、片づけ忘れた子供のおもちゃが転がっているばかりだった。
「用意がないのに犬を飼うなんて、外に捨てるのとおんなじだ」
捨てられたみたいに転がっている砂遊び用のバケツが、濡れ縁に溜まった雨粒に叩かれて、間の抜けた音を響かせている。
「でも、この子が散歩に連れられてないの、見た日がないわ」
ずいぶんと考え込んだ後、也美はそれだけようやく言った。
この家にはもう子供が住んでいないことや、そのおもちゃが片づけられていない理由は、泉も知っている。もちろん也美も。
「雨の日は？」
「雨の日以外は」
柴犬が小さく喉を鳴らして、また哀れっぽい音が響いた。じっと泉を見ている。
「じゃあ今日はずっとここにいるんだな」
ひとりごとみたいに言ってから、泉は手にしていた傘を塀越し、庭の方へと差し出した。
ふらふらと落ちてくる傘に、柴犬はパッと後ろに駆け出し、傘の方を向き直ると、少し離れた場所から怒った声で吠えた。泉が小さく声を立てて笑った。

でもすぐにまた不機嫌な顔に戻ると、塀から離れて歩き出した。
「怖くないのよ」
ずっと吠えている柴犬に告げ、也美は早足に前を行く泉の後を追った。
今家に戻れば予備の傘は手に入ったが、也美はそうしてしまうことが泉の感情に背く気がして、言い出せなかった。
後ろから、泉が濡れないようにと傘を差し出すが、気づいて振り返った泉の也美を見る目が冷たい。
自分は平気で雨の中を歩くくせに、也美が濡れると怒るのだ。
也美を一瞥すると、泉はすぐにまた歩き出し、その背中に拒まれている気がして也美は声をかけられない。
泉の足取りはうんざりしている。そういう気分が伝わる歩き方だった。
（風邪ひいちゃう）
泉はあまり丈夫な方じゃない。気管支が弱くて、すぐに体調を崩してしまうのに。
泉の真横を、徐行する車が通りすぎていった。狭い路地だから自然と泉は立ち止まり、車が行った後も動こうとしなかった。
也美も立ち止まって同じ車をやり過ごし、傘を握って泉の側に駆け寄った。
「学校行くの、面倒」
也美の顔を見ず、悪いのは機嫌ではなく具合なんじゃないかと思うような白い顔で泉が呟く。
「ねえ」
也美はすぐに決めた。
「雨の降ってないところまで行こうよ」
泉の制服の袖を引き、少し強引に自分の傘の中へ入れる。
学校とは反対の方向を目指した。少し歩くと、すぐ駅に着く。駅の周りも構内も、也美たちと同じ学生や通勤途中の人たちでごった返していた。

駅まで辿り着くと、也美は畳んだ傘を泉に預け、人波を縫って券売機へ近付き切符を買った。一番安いのを二枚。

「行こ」

泉のところまで戻ると、そう言って也美は切符を一枚、泉に手渡した。改札機に向かう也美の後を、泉は黙ってついてくる。

也美や泉たちと同じ制服の生徒たちとすれ違うが、声をかけて来る者はいなかった。なるべく知らん顔で歩いて、迷わず、人の少ない下りホームへ歩く。

雨はすっかり土砂降りになってきていた。

泉はつまらなさそうな顔で、ホームに佇んでいる。也美はその隣で、濡れてしまったスカートの裾を見下ろした。靴も靴下も雨のせいで湿っている。

少し待つと、ホームに電車が滑り込んできた。也美はドアに向かって歩き出し、泉がついてこないのに気づくと、その手を取って引っ張った。

電車の中はがらがらで、座席に座ることができた。泉がさっさと四人がけの席の端に座り、也美もその隣に腰を下ろす。電車はすぐに走り出した。

雨粒が窓ガラスを叩き、斜めに痕をつけている。向かいに座っている背広姿のサラリーマンが、眠そうな顔で新聞を読んでいた。也美は、少しどきどきと胸を高鳴らせた。そっと深呼吸する。

具合も悪くないのに学校を休むのなんて、初めてだ。

ちょっと怖い。

（私、よく言ったわ）

一緒に学校を休もうなんてこと、自分が言えるとは思ってもみなかった。

（さむい……）

電車の中の空気はじめじめと湿っぽく、冷えている。也美は少し寒くて、湿った制服の袖を掌で擦った。

濡れた上着は脱いでしまった方がいいのかしら。そう思っていた

也美の肩に、不意に重みがかかった。
目を閉じたままの泉が、怠そうに、也美の方へと寄りかかっている。
そっとその様子を覗く。綺麗な顔。嘘みたいに整っている。長い睫。筆で描いたような眉。その頬に触れたいと、也美は微かに心を震わせた。
「泉、飴、舐める？」
触れる代わりにそんなことを訊ねた。泉はただじっとしている。眠っているように見えたが、きっと面倒で答えないだけだと也美にはわかった。也美は鞄を探って、のど飴をひとつ、取り出した。
銀紙を剥いて泉の唇に檸檬味の飴を触れさせると、自然と唇が開いた。
泉が飴を口の中に収めるのを見てから、也美は自分でも飴を舐めた。
電車はがたがたと体を揺らし、也美たちを乗せて進んでいく。
窓の外は見慣れぬ景色だった。あまり電車には乗らない。乗っても、今の反対方面ばかりだ。
田舎町の、田んぼや畑ばかりが見えている。
一駅が長くて、座席に座っている人たちはみんな眠たそうだった。
也美も自然、うとうととまどろみ始めた。電車の揺れる音が心地いい。泉の体温と呼吸が心地いい。
まどろむうち、いくつかの駅が過ぎていく。ひどく間延びしたアナウンスがさらに眠気を誘った。いつの間にか也美も泉の方へ寄りかかっていた。
どれほどの時間が経ったのか、不意に電車が大きく揺れて、也美ははっと目を覚ました。
「……どこだろ……」
外を見るが、線路の途中、見慣れない景色に場所はわからない。
雨は少し弱くなっていた。
（向こうの空、少し晴れてる）

也美の胸にぱっと喜びが浮かんだ。雨にかすむ空の向こうに、薄く山の稜線が見えた。そのてっぺんの近くは、微かだけれど青い空が覗いている。

時計を見ると、電車に乗り始めてから三十分以上が経っていた。

（もう授業が始まってるな）

少しだけクラスメイトや先生の顔が也美の脳裡にちらついた。それを無理に遠くへ押しやる。

横を見ると、泉はまだ眠っている。狸寝入りじゃなく本当の眠り。

向かいに座っていたサラリーマンはいつの間にかいなくなっていた。

車輌の中にいるのは、泉と也美と、他には学生にも社会人にも見えない男の人がひとりだけ。自分たちがずっと遠くへ来てしまったような気がして、也美はまた少しどきどきした。

あとはもう眠っていられなくて、ずっと窓の外を眺めながら過ごした。

遠くへいくごとに、雨足は弱まってきて、重く垂れ込めた雲が薄くなり、空が明るくなってくる。窓をなぞる雨の線は細く細く、きっともう傘がなくても歩けるほど。

（太陽だ）

薄曇りの空の向こうに、黄色い太陽の輪郭がぼんやりと浮かんだ。

そわそわする也美の気配で、泉が敏感に目を覚ました。短く呻き声を漏らしてから、億劫げな動きで也美の肩に預けていた頭を持ち上げる。

「今、どこ……」

「わからない、でも雨、止みそうだよ」

眠そうな泉の声に也美が答える間にも、雨はさらに細くなっていた。

「次、降りる」

言った泉に、也美も頷いた。もうきっと傘はいらない。

腕時計を見ると、電車に乗った時から二時間近くが経とうとして

いた。文字盤を眺めていた也美は、不意に腕を取られて、泉を見上げる。
泉は黙って也美の腕を掴んだまま、さっさとその時計を外してしまった。
電車が停まったのは、無人駅なのではと疑いたくなるような、閑散とした場所だった。
電車から一歩踏み出すと、雨上がりの、透明に冷えた空気が也美たちの体を包んだ。寒くはなかった。空からはもう、鈍い太陽の光が降り注いでいる。
「止んでる」
空に手をかざし、也美は嬉しい気分で呟いてから、改札口に向かう泉の後を追った。
窓口にいた駅員に精算を頼んだ時、咎められるのではないかと也美は少し怯えたが、眠たそうな顔の初老の駅員は特に何も言わず事務的に作業を済ませた。
改札口を出ると、泉は也美の手から傘を取り上げ、寂れた待合室の隅に立てかけてしまった。お気に入りの傘だったけれど、いいか、と也美はすぐに諦めた。
どうせなら学生鞄も預けてしまいたかったが、さすがにそれを置いていくわけにもいかない。出口がひとつしかない小さな駅には、コインロッカーもなかった。
ぶらりと歩き出す泉の隣に並んで、也美は町並みを眺めながら進んだ。
聞いたこともない駅。もう也美たちの住んでいる県でもないらしい。あまり整備されていない駅前の細い路地は、窮屈そうにバスが通っている。
「あれ、乗ろうか」
也美がバスを指さし、泉が頷く。
バスはそのまま駅前の停留所に停まり、何人かの客を降ろした後、乗り込み口のドアを開けた。也美と泉が乗り込んだ後、数分バスは

その場に止まっていたが、他に乗る客は見あたらなかった。
『はいバス、出ます』
ぶっきらぼうな運転手がアナウンスする。也美は横向きの座席に泉と並んで座りながら、窓の外に見える景色を追った。
ひどく寂れた田舎町に見えた。也美たちが住む場所も、そう都会と言えるような土地ではなかったが、市の計画で開発された駅前通りや住宅街が並び、昼間でも人の行き交いが多かった。
「人が全然いないね」
少し不安になって也美は呟く。何だか自分たちが別の世界に取り残されたような錯覚。
いくつめかの停留所を過ぎた時、泉は何も言わず降車を報せるブザーを鳴らした。也美が外を見ると、周りにはすっかり商店もなく、民家すらまばらにしか見あたらなくなっている。田んぼと畑、それから川と橋。長い橋を渡りきったところでバスは停まった。
泉に続いて、也美もバスを降りた。地元のバスとは違い、料金を後で払わないといけなくて、値段もわからず、まごついた。
「待って、泉」
泉はさっさと堤の方へ歩き出している。大きな川があった。幅は広いが、深いわけでもなさそうだ。堤はゆるやかな坂になり、無造作に草が生えていた。草に紛れて、石を並べた階段が辛うじて見える。その階段を下ると、広い河原があって、そこだけきちんと除草されていた。サッカーのゴールポストや、野球のダイヤモンドがあったから、きっと夕方や休みの日になれば、子供たちが大勢集まるのだろう。
まだ雨露に濡れた草を踏み分け、階段を下りて、泉はそのグラウンドに進んだ。也美も続く。
「広いねえ。野球とサッカー、いっぺんにできるんだ」
也美たちの家の側にも、子供たちが遊べる公園があったが、こんなに広くはない。
「あ、シロツメクサ」

きょろきょろと辺りを見渡していた也美は、グラウンドの隅にシロツメクサが生えているのをみつけて、それに駆け寄った。地面はぬかるんでいたので、革靴の底を滑らせないように気をつけながら。
「泉、泉、おこりんぼきゅうりもあるよ」
嬉しそうに手招きする也美を眺めながら、泉も歩いてきた。
「ほらほら、種が跳ねるの」
小さく細い、槍のような実に也美が触れると、その実がはぜて小さな種が飛び出た。
感触がおもしろくて、草の側にしゃがんだ也美は、もうひとつ実をはぜさせた。
「シロツメクサと葉っぱが似てるのに、違う草なんだね」
也美の側に泉もしゃがむ。
「こっちは、葉っぱがハート形なの。シロツメクサは丸い」
「こっちは、クローバー」
シロツメクサの葉を指して、泉が言った。それから、もう一方の葉に指先を移動させる。
「おこりんぼきゅうりの本当の名前は何と言うか」
「ええと……」
ちょっと考えたけれど、也美にはわからなかった。
「何て言うの？」
「カタバミ」
言いながら、泉は近くに落ちていた棒を拾って、地面に大きく『酢漿草』とすらすら書いた。
「こういう字も書く」
そう言って、隣に『片喰』と書いた。
「夜と、あと雨が降ると葉が閉じるんだ」
言われて也美がカタバミの葉をよく見ると、いくつかその葉が閉じていた。
「雨が止んで、よかったね。開いていた方が可愛いもの」
「噛むと酸っぱいぞ」

言いながら、泉がカタバミの葉を一本引き抜いた。噛むのかな、と思って也美が見守っていると、泉はその匂いを嗅いだだけで噛んだりはしなかった。

「これで真鍮を磨くと綺麗になる」

「ちょっと、待って」

立ち上がろうとする泉を引き留めて、也美は慌てて制服のポケットからハンカチと生徒手帳を取り出した。泉がカタバミの葉を也美に手渡し、也美は、それをハンカチでていねいに拭って水気を落としてから、大事そうに手帳の間に挟んだ。

「四つ葉でもクローバーでもないぞ」

「こっちの方が、可愛いの」

也美は応えながら手帳をポケットに戻し、立ち上がろうとしてよろめいた。

「鈍い」

ぬかるんだ泥にお尻から転びそうになった也美の肩を支え、泉が冷たくひとこと放つ。そのまま、泉は也美の腕を引っ張り上げて、立たせてくれた。

立ち上がった也美の左手を、泉の右手が握った。暖かな感触に也美は幸福になって、そっとその手を握り返しながら、泉の隣を歩く。

「泉は何でも知ってるね」

「そうでもない。ずっと昔に調べたことがあるだけ」

泉の部屋には、也美の部屋にはない図鑑や辞典がたくさんあった。今よりずっと丈夫でなかった子供の頃、学校を休んでベッドに横たわりながら、そんな本を眺めて過ごしていた弟の昔を、也美は思う。本で調べたいろいろなことを、学校から急いで帰ってきた也美に、泉はよく話してくれた。話しすぎて余計に泉が具合を悪くすると、

「お姉ちゃんでしょう」と也美が叱られた。

グラウンドの地面はぬかるみ、その向こうはやはり濡れた草ばかりだったので、泉と也美は来た道を引き返して再び堤の上に上がった。バス停とは逆の方へ、ゆっくり歩き出す。

「ずっとこの道を歩いたら、どこに続くかな」
手を繋いで歩きながら、也美が呟くと、
「海に続くだろ」
と泉が答えた。
それはとても素敵なことのように、也美には思えた。
「海まで行ける？」
「明日も明後日も歩けば」
「そっか……」
でもきっと、それはできない。
長い距離をずっと歩いて、三十分もすると、堤が終わった。バスを降りる前に渡った橋よりもずっと小さな橋が架かっていて、それが行き止まりだった。川は続いていたが、人の進める道がない。
泉と也美は、立ち止まって、川の行方を眺めた。
長い長い間そうしていて、時計がないからどれほど時間が経ったのかもわからないまま、也美はそっと泉の方を見上げた。
「戻ろっか」
泉は黙り込んだまま、まだ川の方――もう少し上、まだ薄い雲に半分隠れた太陽を見ている。
雨は上がっているけれど、風は冷たく、湿った服のせいで余計に肌寒い。也美は泉が風邪をひくのではないかと、そればかりが今は気になっていた。
何も答えない泉から、也美も太陽の方に視線を向けた。弱い光だ。目を細めなくても見られるほど。
「もっとずっと、歩いていく？」
也美が呟くように言うと、その手を握る泉の指先に、かすかな力が籠もった。
「いいよ。泉が嫌になるまで、もっと遠くに行こう？」
その時自分がどこまで本気で言ったのか、後になっても、也美にはわからない。
本当に、そうできると信じていたのに、信じていたはずなのに、

思いを言葉にした時、涙が出そうになった。
この手をほどく時のことを考えて、どうしようもなく悲しくなった。
再び、長い長い時間の後、今度は泉がぽつりと口を開いた。
「腹が減ったな」
「……どこかお店、入ろうか」
泉を見上げ、少し笑って、也美は応える。
笑った也美の顔を、泉が黙ってみつめた。
（気づかれちゃいけない）
それだけを、也美は必死に思った。
泣きそうなのを、気づかれちゃいけない。
泉がそっと瞳を伏せて、也美の手を引っ張った。促されるように、也美は泉と並んで歩き出す。ずっと進んできたのと同じ道。引き返す以外に、泉と也美が歩ける道はなかった。
空を眺めると、遠くの方に、まだ暗い雨雲があるのに也美は気づいた。自分たちがこれから帰るはずの方向だ。
（傘を、拾って帰らなくちゃ）
あの待合い室から、傘がなくなっていなければいいと思った。
それから、柴犬のいる庭にそっと落とされた泉の傘のことを思い出した。
どうか家に着くまでは雨に降られないようにと心の中で祈りながら、也美はゆっくりと進む泉の隣で、その掌の暖かさを感じながら歩いていった。

【04】昼間のふたり

1・也美

チャイムが鳴って、三限目の授業が終わる。教科書を閉じると、也美はちょっと溜息をついた。退屈だったわけでも眠かったわけでもない。たった今終わった古典の授業は也美の好きな単元で、つい、うっとりしてしまったのだ。

「梁瀬さん。……梁瀬さん？」

綺麗に着飾った姫君や女房たちが、豪華な調度品に囲まれ、香合わせなどしている様子を空想していた也美は、名前を呼ばれてはっと我に返った。

それから、自分を呼んだ相手に気づき、にわかに緊張する。

「はい」

意味もなく教科書の表紙に触ったまま、也美はいつの間にか隣に立っていたクラスメイトに体を向けながら、その顔を見上げた。

返事をした也美を見て、相手は少し笑っていた。

「相変わらず、礼儀正しいなあ」

男子生徒の表情は、苦笑のようにも見えた。也美も困って、小さく笑い返した。

「悪い、今のとこのノート、見せてもらえる？　途中書き取れなくて」

也美は、教科書の下になっている古典のノートを、視線だけで見下ろす。

「あの……今日、私も、ちゃんと書けなくて」

相手と目が合わせられず、也美の口調はしどろもどろになった。

「ごめんなさい、他の人から、見せてもらってくれる？」

本当は、ノートはちゃんと取ってあった。也美はノートに文字を書くのが好きで、板書だけではなく先生の言ったこともメモしてい

る。授業はまじめに聞く方だ。好きな教科は特に。
家に帰った後、メモ書きを書き直したり、ペンの色を分けて見やすく、わかりやすくするやり方で復習するから、それまではただの走り書きだけど、人に見せられないほどではなかった。
それでもこのノートを人に見せられないのは、別の理由だ。
「でも梁瀬さん、今の授業、ちゃんとノート取ってたよね」
喰い下がられ、也美は少し驚いた。男子生徒の席は、也美の席から二列離れた後ろの方だ。注意して見ていれば、也美の視線がきちんと黒板とノートを往復していたことはわかるだろう。
でも、見られていたなんて、思ってもいなかった。
「三野ォ、梁瀬さん、泣かすなよ」
困って俯いてしまった也美、笑顔を消してしまった男子生徒の様子を近くで見ていた別の生徒が、からかうようにそう言った。
「ちょっと、来て」
苛立った様子で、三野は也美の手首を掴んだ。また驚いて、也美は伏せていた顔を上げる。相手の険しい横顔しか見えなかった。クラスのみんなが自分たちを見ている気がして、恥ずかしくなりながら、也美は三野の乱暴な仕種に従って、彼と一緒に教室を出た。
掴まれた手首が痛かったけれど、也美は抗議することもできず、竦んだ気分で少し前を歩く三野の後をついて行く。
三野は廊下の端まで也美を連れて行くと、正面から向き合った。
「あのさ」
三野は怒ったような、困ったような、低い声でそう切り出した。
「梁瀬さん、俺にノート貸すのとか、嫌？」
也美は怖くて三野の顔が見られず、やっぱりまた、俯いてしまう。小さく首を振った。
「そんなこと、ない」
呟いた自分の声が言い訳のように聞こえてしまって、也美はさらに言葉を重ねた。
「ごめんなさい……あの、ノートね、らくがきしてあって、恥ずか

しくて、見せられないの」
「いいよそんなの、気にしないから」
「でも、見られたら、やっぱり恥ずかしいから」
「俺に見せられないような内容？」
詰問口調に、也美は怯えて口を噤んでしまう。
「……梁瀬さん、最近俺のこと避けてるよね。最近……っていうか、こないだの放課後から」
力はゆるんだけれど、三野は也美の片手首を掴んだままだ。
「……無理矢理じゃ、なかったと思うんだけど」
三野の声は、どんどん低くなっていく。
怖い、と感じることは、いけないのだと也美は自分に言い聞かせた。
「俺たちつき合ってると思ってたんだけど、違うのかな」
何も答えない自分に、三野が苛立っているのが也美にもわかる。
身を竦める也美の耳に、大きな溜息が聞こえた。
「怖がるなよ、そんなに。悪いことしてる気分になる」
「……ごめんなさい……」
「謝るなよ」
諦めたように溜息をついた後、三野の声音は苦笑じみたものになった。
「好きな人、いないって言ったただろ。だったらつき合ってくれって言ったら、頷いただろ。嘘だったの、それ？」
「嘘じゃ、ないの。好きな人は、いないの」
「なら、俺のことも好きじゃないってだけか」
也美の手首を掴んでいた三野の手が、やっと離れた。
「俺だけ浮かれてて、馬鹿みたいだ」
それだけ言い捨てると、三野は也美の前からきびすを返し、教室の方へと戻っていった。
廊下の片隅で、也美はひとり、ぽつんと取り残される。
かすかに、女の子たちのささやく声が聞こえた。何気なく声のす

る方へ目を遣ると、同じ学年の、同じ制服を着た女の子たちが、四人くらいで集まって、也美の方を見ていた。
也美と目が合うと、女の子たちはさっと視線をそらし、またささやき声を響かせながら去っていってしまう。
（また、だわ）
何となく力が抜けて、也美は廊下の壁に背中で寄りかかった。
（どうしてうまくできないんだろう、私）
三野のことを傷つけた。そんなことをするつもりじゃなかったのに。
泣いちゃ駄目だ、と思うのに涙がにじんできて、也美は慌てて上を向いた。首をねじって、窓の外を見るふりで、涙を飲み込む。
「あれ、梁瀬さん、どうしたの？　授業始まるよ」
また誰かに名前を呼ばれて、也美は急いで洟を啜った。反射的に笑顔を作る。すぐそばに、別のクラスの男の子ふたりがいた。
ふたりとも、也美が必死に隠そうとしていた涙に簡単に気づいて、表情を曇らせる。
「マジでどうした？　誰かに何か言われたのか？」
どうやら、自分がときどき女の子たちから面と向かって、影で聞こえよがしに、さまざまな悪口を言われているのは、みんな知っているんだろう。
それがわかって、也美はますます悲しくなった。
悲しいのに、ちょっとおかしくなった。
「何でもないの。教室、戻るね」
声をかけてくれたふたり、その人たちの名前も、也美は知らない。
でもこんな場面を見かけた他の生徒たちは、噂をするのだ。也美が、男の子の気を惹こうとして、振り回す、我儘な女の子だと。

2・泉

「あれ、おまえの姉ちゃんじゃねえ？」
クラスメイトの言葉に、階段の踊り場から次の階段へ移ろうとしていた泉は、目を上げた。
「堂々としてんなあ」
クラスメイトは感心した声を上げている。泉はちょっと冷たい目になって、廊下の隅で俯く也美と、その前に立ちはだかっている男子生徒を見遣った。
興味津々と踊り場で足を止め、廊下の方を見ているクラスメイトを置いて、泉は次の授業がある音楽室へ向かおうとした。
「っていうか……ひょっとして、揉めてるのと違うか」
だが、その言葉で足を止める。振り返って也美たちの方を見ると、たしかに、男子生徒が也美に詰めより、也美は首を竦めて身を固くして、俯いてしまっている。
とても仲のいい恋人同士が短い休み時間を惜しんで逢瀬しているようには見えなかった。
泉はしっかりと也美の手首を掴んでいる相手の手を見てから、再び歩き出した。
「おい、梁瀬、いいのか？」
「いいも何も。関係ないだろ」
「冷たいなあ」
くだらない、とクラスメイトの呆れた声を聞きながら泉は思った。
「姉弟でわざわざ同じ高校に来るほど仲がいいと思ってたのに、おまえら学校で全然口聞かないし、顔も合わせないのな」
階段を昇る泉の隣に、クラスメイトが並んだ。泉は移動教室の時に友達とわざわざ肩を並べて歩くようなことをするつもりはなかったのに、このクラスメイトはいつもなぜか勝手に泉の横をついて回る。
以前に、何なんだ、と理由を訊ねたら、「梁瀬のことが気に入ったから」と、はなはだ不可解な返答が帰ってきた。

「朝は一緒に来てるみたいなのにさ」
「同じ学校になったのは、家から歩いて通える一番近いところだから。始業ぎりぎりに家を出て、同じ目的地だから一緒になるだけ」
「クールだね、おまえ」
冷たいとかクールだとか、言いたい放題だ。
「俺だったら、あんなかわいい姉ちゃんがいたら、自慢しまくるのにな」
「あいつを姉だなんて思ったこと一度もない」
「またまたほんと、クールな弟だね」
茶化すようなクラスメイトの軽い口調に、泉はかすかに笑みを浮かべた。クラスメイトはもう見えもしないだろう也美たちを気にして、ちらちら後ろを振り返っていたから、その表情に気づかない。気づいていたら、きっと「おっかない笑顔だなあ」と首を竦めただろう。
本当のことを言った。泉が生まれてこの方、也美を姉だなんて思ったことは一度もない。
昔から、今まで、ただの一度も。

3・再び也美

授業をさぼってしまった。
也美は四限開始を知らせるチャイムの数分後に、保健室のドアを叩いた。
「あら梁瀬さん、またなの」
自分の母親よりも少し若い養護教諭に、也美は両手でおなかを押さえて見せた。
「おなか、痛いの」
本当は痛いのは胸だった。

「生理痛？　毎月ひどいのねえ」
手招きされて、也美はスチールデスクの前に座る養護教諭の方まで近づいた。小柄で、ふっくらした、美人ではないけどかわいい雰囲気の養護教諭は、厳しい顔で也美の様子をじろじろ見遣る。
「薬、飲んだけど、治まらなくて……」
「朝ご飯ちゃんと食べた？　顔色悪いわよ、仕方ない、ちょっと寝ていきなさい」
ほっとして、也美は頷くと、ベッドの方へ向かった。三つ並んだベッド、真ん中のカーテンが閉まっている。先客がいるようだ。
「午後になっても直らないようだったら、帰りなさい」
「はい」
ベッドに潜り込みながら、也美はすなおに頷いた。養護教諭が、也美の回りのカーテンも引いてくれる。
「お母様も働いてらっしゃるのよね」
「おうち、近いから大丈夫です」
そう、と頷いて養護教諭が也美の横たわるベッドから離れていく。
真っ白なカーテンに囲まれた真っ白なベッドの中で、也美は真っ白な天井を見上げた。
（こんなことくらいで授業を休んだら、駄目なのに）
先刻の三野のことを思い出したら、こらえていた涙が急に零れてしまった。啜り上げたら、思いの外その音が大きく部屋の中に響いて、慌てる。
（もう、すぐ泣く）
手の甲で目許を拭って、也美はぎゅっと目を閉じた。
保健室の上は一年生の教室で、椅子や机が床を擦る音がかすかに落ちてくる。授業を休んでこうして保健室にいる時、そんな音を聞くのは、也美を心許ない気分にさせた。
（学校に来ないで、まるっきりさぼった時は、不安になんて全然ならなかったのに）
学校の中にいる方が落ち着かないなんて、変な話だと也美は思っ

た。
（でもあの時は、泉がいたから）
泉のことを思い出すと、不安と後悔ばかりだった也美の胸に、不意に灯りがともるような感触が沸き上がる。
泉と一緒に学校を休んで、遠くに行った。遠くと行っても、電車で一本。でも全然見知らぬ土地に向かった。それでも全然怖くなかった。泉がいたから。
（そう、泉）
もう一度、今度はあまり音を立てないよう気をつけて啜り上げてから、也美はひとりでちょっと笑った。
先刻の授業、古典の物語を教師の声に合わせてひもときながら、空想していたのだ。
もし自分が、この時代に生まれていたら。
（焚きしめる香を選んだり、着るものを選んだり、歌を考えたりして、きっと飽きずに毎日暮らしていたわ）
自分が姫君になれるなんて思えなかったので、それに仕える女房がいい。もしくは――
（泉だったら、きっと殿上に昇る公達）
その若君に仕える女房。
そんな想像をしながら、ノートの隅に絵を描いた。とても泉になんて見えなかったけど、袍に、指貫、檜扇に、垂纓冠、思いつくまま線を足していって、ひとりでこっそり笑っていた。
それを誰かに――三野に見られていたのだ、と思うと、恥ずかしくて、逃げ出したい心地になった。
その絵を実際三野に見られるなんて、とても考えられることじゃなかった。
だからノートは貸せなかったし、だから三野は気を悪くした。
（馬鹿みたい、恥ずかしい）
ひとりいたたまれない気分になって、也美がまた小さく啜り上げると、不意に間近のカーテンが勢いよく開いた。

「ちょっと。さっきからくずぐずぐずぐずぐず、うるさいよ」
隣のベッドに寝ていたらしい女子生徒が、半身を起こしてカーテンを開き、也美のことを睨みつけている。
「ご……ごめんなさい」
驚いて、也美は急いで指先で濡れた目許を押さえた。隣に人がいることを失念していた。
「……ああ、あんた」
短い髪をした、美人だけどきつい顔立ちの女子生徒は、也美を見遣ると、どことなく皮肉げな様子でそう呟いて、笑う。
「四組のお姫様か」
言葉の内容よりも、その口調の嘲笑う感じに、也美はどきりとした。
也美が何か答えるより先に、彼女はさっさとカーテンを閉めて、その向こうで再びベッドに横たわる気配が伝わってくる。
（びっくりした……）
何となく、也美は彼女のいるベッドに背を向けて、寝返りを打った。
きっと彼女も自分を嫌う女子生徒のひとりだろう。そんな感じの声音と、まなざしだった。
嫌われるのは昔から慣れっこだったので、今さらいちいち傷つかない。そう自分に言い聞かせながら、也美はそういう自分が少し悲しくなる。
人の気を惹きたいなんて、今まで一度も思ったことがなかった。好きな人はいない。嫌いな人もいない。誰とでも平等に穏やかに、誰にでも平等に優しくつき合いたいのに、勝手な憶測はいつでも也美について回る。
（お姫様なんかじゃ、ない）
自分がひとつのことに関してはとても我儘で貪欲だということは、也美も知っている。
それ以外のことで我儘だと言われるのは、何だか腑に落ちない感

じだった。
そんなことを考え続けるのは気が重かったので、也美はもう一度、無理に目を閉じた。
背中の彼女が気になってしまって、しばらく緊張していたが、いつの間にかうとうととまどろみ始めていく。
「梁瀬さん。梁瀬さん、授業、終わったわよ」
そうして気づいた時には、そばに養護教諭がいて、自分の名前を呼んでいた。
「はい……起きます」
眠たい目を擦りながら体を起こすと、養護教諭が吹き出す声がする。
「あなた、本当に可愛いわねえ」
くすくす笑いに恥じ入りながら、也美は制服と髪を整えて、ベッドを降りた。
「具合はどう？」
「眠ったら、落ち着きました。教室に戻ります」
答えながら振り返ると、隣のベッドはもう空だった。
保健室を出て教室に戻ると、すでにクラスメイトたちはそれぞれ弁当を開いたり、学食に向かったり、昼休みを始めている。
也美はそっと中に入ると、自分の席に座った。ちらちらと視線はやってくるが、声をかけてくる者はいない。
最近一緒に弁当を広げていた三野は、友達の男子生徒ともう食事を始めている。
一緒に食事をしたがったのは三野だけれど、男の子とふたりでそうしていると、またひそひそ話が聞こえてくるから、也美は正直なところほっとしている。
それを三野に申し訳ないと思った。
本当はひとりで充分なのだ。人から疎まれるのは嫌だけれど、誰かと特別仲よくしたり、お手洗いまで誰かと連れ立つようなことは必要ない。

（できれば、ああいう輪に、入っていけたらいいんだけど）
近くで女の子数人が机を向け合い、弁当を囲み、楽しげにはしゃいでいる。ああいうふうにできたらいいのにと思うけれど、気後れしてしまって自分から彼女たちの中に入っていくことはできないし、彼女たちが也美を誘ってくれることもない。
（でも、大丈夫）
ひとりでも大丈夫だと思うのは、根本的なところで、自分がひとりじゃないと『知っている』からだ。
だからどこにいても、誰といても、誰がいなくても、也美が寂しいと思ったことは、生まれてから一度もない。
なるべく目立たないように、そっと弁当箱を机の上に取り出しながら、也美は不意に気づいた。
（今日、火曜日だわ）
大事なことを忘れていた。也美はハンカチで包んだ小さな弁当箱を手に取ると、急いで、椅子から立ち上がる。そのまま教室を出て、小走りに廊下を進んだ。
階段をひとつ昇って、向かったのは第二音楽室。
そっとドアを開けた時、ピアノの旋律が聞こえたから、間に合った、と也美は胸を撫で下ろした。
この学校には音楽室がふたつある。たぶん合唱部とブラスバンド部の活動が熱心なせいだろう。その片方、第二音楽室は、火曜日のお昼休みの少しの間、ピアノの音が途切れず聞こえる。
グランドピアノの前で、何でもない顔をしながら難しそうな曲を弾いている制服の後ろ姿を確認すると、也美はその視界に入らないよう注意しながら、近くの壁際を選んで座った。
綺麗な音楽に聴き入りながら、膝の上で弁当を開く。しばらくそうしていると、不意にピアノの音が消えた。
ピアノの前から立ち上がった泉が、也美の方へ歩いてくる。
「もう、おしまい？」
「腹減った」

泉は也美の隣へ無造作に腰を下ろし、無造作に也美の弁当の唐揚げを横取りした。
ここに来るのが遅れたから、今日はあまり泉のピアノを聴けなかった。家に帰ればいつでもその音色を聴くことができるのに、それでも也美はひどくがっかりした。
「お弁当、食べる？」
也美が自分の弁当箱を示すと、泉はさっさと箸ごとそれを奪って、食べ始めた。本当は特別教室の中は飲食厳禁だったけれど、第二音楽室は授業では滅多に使われないし、人目につくこともない。
音楽科の先生と仲よくなった泉は特別に鍵を借りていて、四限に授業のある火曜日だけ、こっそりとここにいる。それを知っているのは、音楽教師の他はきっと也美しかいない。
「痕ついてる」
弁当の半分を食べてしまってから、泉が也美の顔を見て、そう言った。弁当箱を受け取りながら、也美は片手で自分の頬に触れる。布団か枕の痕がついてしまったらしい。
「やだ、顔、洗ってくればよかった」
「格好悪ィ」
小馬鹿にするように嗤った弟の顔に、也美は間近で見とれた。その顔が近づいて、自分の頬に唇で触れられるまで、じっと身じろぎもせずにいる。心臓が壊れそうなほどに鳴っているのを、泉に気づかれたくなかった。気づかれたらきっともっと笑う。
「眠い。十五分寝るから、起こして」
也美から離れると、泉はそう言って、壁に凭れた。
「保健室に行ったら？」
こんなところで眠っては、体が辛いのではと心配した也美の提案を、泉は目を閉じて無視した。
泉が瞼を下ろしてしまったので、也美はその姿に心おきなくみとれる。ひとつ離れた弟の姿を、也美が見飽きたことはない。いつまでも眺めていたかったし、いつまでもそばにいたかった。

泉さえいれば教室でひとりでも大丈夫だと、そう思う自分の心が間違っているのか、正しいことなのか、也美にはわからない。
たとえ間違っていたとしても、心は変わることがないから、考えないようにしている。
好きな人はいない。嫌いな人もいない。そんな言葉で簡単にくくることができるのなら、きっともっとずいぶん楽だった。
好きな『他人』はいない。それが也美の真実だ。
細くて長い足を床に投げ出し、腕組みで目を閉じる弟に、也美はそっと向かい合った。どうか泉が起きませんように、と願いながら身を寄せる。
空気すら動かさないように慎重に、慎重に唇を近づけた也美は、泉の唇と触れあう寸前、その目がうっすら開いていることに気づいた。
反射的に身を引こうとした也美の片手を、泉が掴む。
それだけでもう也美は身動きが取れない。
「するんじゃないの？」
問う泉の声音は意地悪だ。
「しない。姉弟だもの」
也美の答えに、泉がまた笑った。今度の笑顔は優しくて、泉の得意な皮肉っぽい笑顔よりも、最高に意地悪だと也美は思った。
そのまま泉は何も言わず、ただ也美の腕を軽く引いた。
誘われるように、也美はもう一度泉の方へ顔を近づけた。目を閉じて泉の唇に唇で触れる。
触れあった刹那、いろいろなことが頭を巡った。二週間前の放課後、教室で三野にそうされたこと。同じ日に泉にもそうされたこと。触れあうことに一切の罪悪感がなかった自分。幸福感だけが胸を占めることに後ろめたさを覚えた。そして今も。
「……」
しばらくの間、泉の乾いた唇の感触を覚えて、それから也美はゆっくり体を離した。泉の隣に座りなおし、泉と同じように体重を壁

に預ける。
「十五分」
「うん」
念を押した泉に頷いて、也美は床に置いた弁当箱をまた膝に置き直した。
あと十五分、倖せな時間が続く。
ここには自分と泉以外誰もいない。誰にも見られていない。誰も知らない。
蜜月を自分から手放すことなんて、この時の也美には、ほんの少しだって考えることができなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9393x/

雨が止んだらお別れね。

2011年10月26日06時35分発行